

# 彙報

昭和六十二年度

文明研究会大会

昭和六十二年十月二十一日、東海大学湘南校舎松前記念館において、第六回東海大学文明研究会大会ならびに総会が開催された。大会では、本年三月に退職された文明研究会会長、石田一良氏をお招きし、特別講演をお願いした。また総会においては、会計報告及び活動報告がなされ、昭和六十二年度の決算と予算案、文明学会への名称変更を含む規約の変更が承認された。

特別講演

「日本人のヨーロッパ観の変遷」

前東海大学文学部教授 石田一良氏

研究発表

「存在論雑考——フッサールとハイデガー——」

東海大学大学院 浅見聡

「プラグマティクス——プラトンにおけるもうひとつのピロソピ

アのあり方について——」

東海大学大学院 平野陽一

昭和六十二年度

東海大学文学部文明学科秀作卒論発表会

昭和六十二年六月二十日、東海大学松前記念館において、第四回秀作論文発表会が開催され、昭和六十一年度に文明学科各課程に提出された最も優秀な論文の発表が行なわれた。

「餅なし正月について——坪井洋文説再考——」

日本課程卒業生 飯田誠二

「斉の桓公の覇たる所以——『呂氏春秋』における一考察

——」

東アジア課程卒業生 米倉千鶴

「古代インドにおける菜食傾向——肉食から非肉食へ——」

南アジア課程卒業生 永田美和子

「古代エジプト新王国時代の朝貢図について——貴族墓内壁画からの一考察——」

西アジア課程卒業生 中山由美子

「リトワ大公国——ルテナアの支配をめぐって——」

東欧課程卒業生 水口宏

「英国社会主義——その本質とフェビアン社会主義——」

西欧課程卒業生 藤田加生利

昭和六十二年度

文明研究会例会

四月例会

「空海と『三教指帰』」

本学大学院生 八木修

「アルブレヒト・デュラーの自画像の変遷」

本学大学院生 石原綱成

五月例会

「湿原の民」

本学大学院生 小板橋美奈

「主の祈りについて」

本学大学院生 吉川彰二

七月例会

「フーコーの文明論——脱近代への実践——」

本学大学院生 中川久嗣

「近世デนมマークの刑罰」

本学大学院生 陸路美礼

九月例会

「『歌経標式』による万葉歌の分類」

本学大学院生 倉田安里

「最澄の国家観」

本学大学院生 中野雅之

十一月例会

「中王国時代におけるエジプトの南方政策——スビアの要塞にみるその政治的・経済的役割——」

本学大学院生 大橋ルミ

「Siva 神への礼拝に見られる Siva と aman の対応関係について」

本学大学院生 折居貴子

十二月例会

「オットー・イェスベルゼンの「不変化詞」について」

本学大学院生 西田博朗

「宋・元時代の算学にみられる方程式について」

本学大学院生 長龍子

一月例会

「ガンジーの菜食主義について」

本学大学院生 平田明裕

「ヘロンのブネウマ観について」

本学大学院生 和泉ちえ

昭和六十二年度 文明学科卒業論文題目

文明日本課程

青木 敏明 都市と下水道

雨木 秀文 静岡県久能における石垣イチゴの現状と問題点に

ついての一考察

荒木 智美 会津藩婦女子の籠城

飯島 浩樹 武田信玄の戦国法「信玄家法」による領国支配のあり方

池田 進 長州藩の攘夷挫折

石立香波美 江戸城無血開城

井高 健二 鎖国評価論の歴史——辻善之助の鎖国評価論を中心

心——

岩永 孝志 江戸川区花卉園芸農業の現状

植本 史朗 官営八幡製鉄所の立地条件

宇都宮 哲 『文明論之概略』における西洋文明摂取論

大島 麻里 中世武家家訓における武士像

奥山 論 日米修好通商条約締結における堀田正睦の果たした役割

加藤佐知江 武蔵野の水車

金久保明彦 三井家初期の相続について

川附 育子 織田信長と茶について

木藤 尚子 新渡戸稲造『武士道』について

行田 幸雄 繊維産業

鯉沼 小枝 日本の野球史——軟式野球を中心として——

小芝 英則 江戸川区工業の実態と産業振興の課題

佐々木清政 神田川の都市水害

佐藤 明子 キダールの女子教育（私塾からフェリス学校設立まで）

菅谷ひろみ 養老川の水利用——耕養社による西広堰経営——

助田 雅己 吉田松陰の家庭教育論

鈴木めぐみ 塩売行商人をヤシナイオヤとすることに於ける考察

高橋 真美 嫁の地位をめぐる贈答関係——オヤモトと嫁の関係を中心として——

龍見 学 日置流の成立とその射術について

塚常 祥子 戦後日本における大火の地理的要因

桃原須賀子 『久米仲里間切旧記』にみる雨乞い——雨乞歌謡にみる雨乞儀礼とその信仰——

新見 恭洋 農業機械の進展と徳島県土成町の農業の現状

西方 幹雄 玉川上水の水利調整——分水を中心に考える——

西村 克朗 沼八幡宮の氏子の意識と年祭の性格

西村 文一 歴史と地理を背景に考察した秦野市における地名の研究

藤森 俊明 大都市周辺部における都市化の実態——浦和市を事例として——

増田 昭人 江戸時代における町火消の存在価値

松下 和広 変わってゆく食生活

丸山 律夫 かくれキリシタン教——『天地始之事』を基に——

柳 栄一 勝海舟の求めた海局

山崎 晶弘 東京都江東区における工場の立地移動

山根 真理 古代・中世における旅

山本 馨 村落共同体と下層隷屬農民

吉沢 光代 平田篤胤著『稻生生物怪録』の研究

渡辺 淳一 信太妻伝説の内部要素の枝わかれからみる重要性

紙谷 幸生 江東区における民族行事の違い

谷沢 昭卓 『社会契約論』におけるルソーの思想と中江兆民

への影響

石松 芳宣 一般木造住宅の建築——住宅の建築施工と過程——

鈴木 文克 『弁道話』における「只管打坐」

新堀 孝之 遊女の足跡

青森 宏悦 「DISCO」ブームについて

荒井 亨 つかこうへいの描いた人間像

有沢 久嗣 起倒流柔術の歴史

池谷いづみ 年中行事の二重構造について

稲本 恵子 小坪における女性の「ヒ」と産育儀礼

上田 亜紀 津田梅子、私塾創設に至るまで手記をもとに考察

宇佐美博幸 日本酒の種類による価格の差

遠藤 修 東武鉄道の沿線開発

大井川康博 西鶴に見る愛欲の女神——大阪町人西鶴の描く太

夫——

小河麻衣子 明治女学生における制服の変遷

加藤 康一 戦後・東京におけるオフィスビルの立地動向

金丸 孝宏 ブドウ栽培地域の現状と問題点

河合美奈子 家の神と女性の関わり

木島美佐子 伊勢崎織物業地域の合理化と問題点

木下ちひろ 江戸時代の小袖模様の変遷について

國谷 貴保 『日本外史』の影響その原因

河内 俊之 現在の講集団にみる機能の変換——桜井徳太郎説

との対比——

小林 守 佐久間象山の海防論

齊藤由美子 林八右衛門の『勸農教訓録』について

酒井 真澄 大仏造頭と宇佐八幡神との関係

佐々木友子 『延喜式』内神社例祭にみえる食物

塩野谷篤弘 戦国時代における雑賀党の役目とは

東海林淳子 曆と日本人——明治改曆の大混乱——

杉本 康徳 近代日本商品流通における対北海道との輸出入関

係

鈴木 健二 船中八策の政治的帰結における大政奉還

砂田 武文 改新の詔第二条に見られる斥候の意義

高瀬 一郎 生い立ち、戦略、政策から考える政宗と秀吉の葛

藤 高森 真一 蛇はなぜ鉄に弱いのか

谷山 健一 保土ヶ谷宿の成立と初期の変遷及びその意義につ

いて

中條 一郎 古代日本の車について

津野 隆之 日本における擬制的親子関係についての考察

中谷 利明 人形と信仰

西田 知生 氏家地域の福田開発と市の堀用水

西村 直人 サエノカミ信仰について

野村 裕司 横浜の近代化に伴う町並の変遷

羽鳥かおる 榛東村の葬送——今日の葬儀はどのような様子であるか——

藤原 裕也 相模国分寺「法隆寺式伽藍配置」の性格

馬着 一侍 港北ニュータウンと都市農業

丸山 和晃 鋸——消えゆく伝統技術——

山口 香織 建武の新政の崩壊——足利尊氏を通しての研究——

山根 安人 明治後期・大正期における東京西郊の農村の変貌

吉岡 伸 奈良時代の災害——『続日本紀』にみられる災害と対策について

吉野智可子 空海入唐求法の旅

周 瑞貞 台湾のバイワン族に関する研究

周 瑞玲 台湾における民間信仰についての一考察——特に宗教思想の概念を中心に——

陳 志森 日本の現代経済について

陳 政樺 台湾に於ける食物と信仰に関する一考察

津田 時子 上方和事の代表作『廓文章』について

早川 精一 神津島の漁業の変貌

池田 明弘 江戸川区の伝統的工業

今村 孝次 遠賀川の川漕水運

戸塚 治 江戸時代の蒲原宿の様子

平山 泰之 実存とその周辺について

本田 明士 静岡井川に見る地域変貌の問題点

亘 昌彦 海上輸送の技術革新と横浜港の機能変化

### 文明東アジア課程

朝隈 周作 光華寮問題について

穴水 祐介 『寶娥宛』における夢

天野 才 上海の衛星都市問題とその問題点の一考察

石井 文彦 唐代期の長安における邸店の役割の考察

板尾巳紀男 中国の旧伝統的観念が計画生産に及ぼす影響

市川 俊宏 蠱毒伝説の由来についての一考察

鶴澤 光児 在華紡の発展とその背景における市場操作

江川 憲英 新时期映画の探索

奥出 正子 中国における甘蔗製糖技術の発展

鍛冶田 隆 中国豚の品種特性と展望

草苅 和寛 植民地期の日本語教育

窪田 学 生産責任制導入以降の人口上昇傾向の要因

小泉 岳人 第二次大戦期の中国における日本軍の細菌戦について

小浜 正志 新婚姻法の衝撃——一九五〇年新婚姻法における一考察——

小山 昇 韓国一九五〇年農地改革の意義

後藤 三蔵 安重根の裁判と東洋平和論

庄司 克典 壬辰倭乱における威鏡道士豪を中心

住野 正敏 商団事件に関する一考察——国民党革命派としての

の廖仲愷の対応をとおして——

曾根 京子 中国の剪紙

高山 弘志 京漢鉄道が及ぼした沿線農村経済に対する影響に

ついて

谷 豊 大久保利通の対東アジア政策

千葉納央実 『搜神記』と周辺の書物に見える龍の雌雄性につ

いて

津田 優子 現代中国の医療保健気功

戸田 勝広 蒋介石の連ソ容共声明と反共声明

鳥海 英郎 「華洋書信館について」——清末の郵便事情を概

観しつゝ——

成瀬 伸康 鄭風・衛風における一考察

根津 雅丈 中山艦事件にみる蒋介石の人物像

野沢 文子 殷周青銅器に於ける鳥形紋について

濱野 竜一 五・三〇事件と李立三コース——都市工作重点主

義をめぐる関係

福島 聡 新界租借の背景とその本質

藤好和香子 中国の民間伝承における「狐」の存在意味とその

理由

増田 勝秀 現代中国における太極拳の医療的効果について

松本 忠行 漢代における田租の性格

光森 克之 漢口における日本綿糸の進出

山崎 聡 清末の中国茶衰退に於る一考察

横森 智 同治元年前後における江西省諸教案について

吉原 和伸 今日中国における「家の教会」の存在と三自愛

国教会の現状

湯澤 健一 大唐三蔵取経詩話の成立と展開

大鐘 啓靖 関東大震災における朝鮮人虐殺事件の報道——

『静岡民友新聞』を中心に——

大松 謙太 現代中国のスポーツ政策——スポーツ社会学の視

点から——

中野真一郎 パール・バック『大地』に対する評価と今日的意

義について

古屋 敬次 鄧茂七農民起义軍の反乱と葉宗留孤工起义軍の反

乱

本合真奈美 中国製糸業の近代化への道程

増倉 清次 高句麗の五部と領域統治

松尾 忠則 壬午軍乱における日本政府の対応について

毛利 希彦 清代における学校制度「官僚への最初の関門」

山中 克之 蜀漢政府と巴蜀豪族——蜀漢政権が重要視した地

域と軽視した地域——

菅井 正仁 中国体育から見た現代中国野球

九月卒業

小林 昇 戦国時代における蜀楚の關係——秦の滅蜀以前の蜀を中心として——

藤原 裕子 中国にみる女性観の普遍性について

久保田徳彦 中国農村に於ける婚姻について

佐藤 光彦 五四運動と新文学運動について

文明南アジア課程

鵜飼真理子 一九六一年ダウリー禁止法とその背景

浦島 秀次 インドの稲作農業

大久保和隆 インドの鉄鋼業の歴史

菊永 弘美 ジャワ更紗——文明と文様——

木名瀬雅巳 第二次世界大戦期におけるインド独立運動——一九四二年を中心として——

篠原 孝次 両界曼荼羅の構造と比較

島野 恵子 インド高等教育をめぐる若干の問題

鈴木みち子 ムガル朝盛期におけるインド・ムスリム文化

関 公二 中印国境における両国外交關係

館尾 雅資 文明史的観点から見たインドにおける日本の経済援助

辻 直美 クシャーナ貨幣と仏教神像

寺内みちる 『エリュトウラー海案内記』にみるローマ帝国の

南海貿易とインドのようす

富樫 均 インドの五カ年計画と貧困の追放

中西 恵一 不可触制と部落問題の比較研究

畑戸健太郎 インド独立後の初等教育

日向 照高 インド綿工業

日比野宣文 香辛料から見たインド料理

平瀬 一義 インドにおける旱魃とその対策

広瀬 英樹 インドにおける鉄道史

星野 綾子 近代インドにおける中間層

松田 幸一 バングラデシュの米作

松永 敦嗣 インドの貧富の差

宮坂 浩一 仏教の神の起源とバラモン教

米内山久美 インドのミトラとイランのミスラ

米沢 寿也 インドにおける近代学校制度の成立

荒巻 稔晴 ガンデイーの非協力運動

安西 昌幸 弥勒菩薩の信仰と思想

大橋 進 インド独立におけるガンデイーの指導力

下山 隆史 ガンデイーの見たスワデン運動

横山泰二郎 インド解放におけるガンデイーの役割

佐藤 雅樹 「ジャータカ」と「イソップ」との比較

森 憲治 東南アジアの麻薬

平本 知範 インドにおける不可触民の差別問題

## 文明西アジア課程

- 阿部 憲子 ティムール朝時代のヘラートについて  
荒井 昌弘 「白色革命」期イランの土地改革の農村への影響  
井上 涼子 後ウマイヤ朝とキリスト教勢力  
内田 千文 オスマン帝国におけるハレムの組織について  
栗原 耕子 サファヴィー朝下の土地保有制度  
河野 歩 ゲジエコンドの都市化  
佐藤かおる アッバース朝革命の背景  
篠田 晶子 アンダルスにおけるターイファ時代の政治  
相馬 希子 モハーチの戦いまでのトルコとハンガリーの関係  
永井 智子 ビュスベックの書簡からみたスレイマン像  
野田 万平 現代エジプト農村部の人口問題  
長谷川仁史 パーブルの前半生——中央アジアからインドへ——  
藤代 雅秀 コンスタンティノープル陥落の要因について  
前田 智子 「統一と進歩」委員会とトルコ主義運動  
安延 尚文 オスマン帝国チュリップ時代の実情  
山本 学 サードク・ヘダーヤト著『盲目の梟』論  
横山ゆかり ムハンマド・アリー治世下のニザーム・ジャディード  
池永 和子 サラディン、その人物像について  
千川原弘子 『千夜一夜物語』の香り

- 武藤 郁子 一九七〇年代トルコにおける国民救済党について  
鈴木 泰幸 アッタールの『鳥の言葉』に於ける喩話について

## 文明東欧課程

- 池田 晶子 一九世紀後半から二〇世紀初頭における日露関係  
稲垣新太郎 スターリンの独裁期における内政について  
采澤 宏明 チュッチェフにおける「分裂」する知識人像——  
主として、彼のロマン主義解釈をめぐって——  
大久保加菜 ソビエト児童文学の目的と現実  
大野 勝己 ゴルバチョフ改革——ソ連は再生できるのか——  
大村 克己 ソ連における官僚制の発達と改革  
大和田弘克 キリスト教がバルカンに与えた影響  
奥山 菜穂 現代ソビエトにおけるパレンエ  
河原 明美 教科書に見るチェコスロヴァキアの教育について  
川本 正樹 ロシア革命におけるボリシエヴィキと他の政党  
神田 透 ソ連における農業の位置・形態と今抱えている諸問題  
斎藤 洋一 東欧諸国におけるドナウ河との関連とその経済について  
鳴原 勝之 戦後チトーを中心としたユーゴスラビアの政策について  
菅原 茂 ソ連の二つの権力機構 KGB について



菅原 愛 イヴァン雷帝

鈴木 志保 ロマノフ王朝崩壊時におけるラスプーチンの影響

高橋 公子 ロシア正教史から見た日本における正教布教の歴史

竹内 孝枝 革命的群衆

竹内 暢彦 チトーのバルチザン闘争における活躍

田中 郁子 ワルシャワ蜂起の一考察

田中英三郎 シベリア極東開発におけるバム鉄道の意義

田辺 真樹 チャイコフスキー

玉川久美子 ユーゴスラヴィア国家の成立

徳江 容子 コサック史

富崎 豊和 現代文明におけるアナキズムの再生——バクーニ

ンの学校解体論を中心として——

豊野 智子 東欧児童文学について

道工 桃子 グルジア民族の愛国主義

羽生 静由 八世紀におけるイコノクラスムの役割

平野 聖子 東欧諸国の民族衣裳について

福山 剛 シベリア開発の問題

藤井 康博 シベリア開発におけるKSプロジェクトとNSプロジェクト

保坂ゆかり 古代スラヴの信仰とキリスト教

増田 佳三 エカテリーナ二世即位にみる宮廷変革の意味について

見上 洋一 シベリア開発と中ソ対立

村上 卓二 ユーゴスラヴィアにおけるトルコ支配について——とくに借用語を中心に——

谷貝 俊也 東西両教会分離の背景

山本 伴子 東欧における民族舞踊

和田 弘子 イグナーツィ・ヤン・パデレフスキー論

新井 隆太 ソ連社会とスポーツの関係について

池田 匡利 マルクス・エンゲルスの『共産党宣言』

篠崎 太郎 ソ連における結婚と離婚

清水 雄二 ブルガリア農業発展の歴史

### 文明西欧課程

安部美奈子 肉食人種であるヨーロッパ人の生死観

飯野 千鶴 バロックの都ウィーン——その時代精神から——

石塚美千子 デューラーの女性像

稲毛 良晃 クルマ社会への提案

大川 幸博 日米の色彩嗜好——其影響と展望——

大橋 由美 ダダ——その歴史の意味——

小川理恵子 ルイ十四世治下の宮廷女性

小田 毅 アメリカインディアンの文化変容

角 えみ子 パレエ・リュッスのプリシティヴィズムとエキゾシズム

川上 和彦 ラファエロの三大作品

木村 正人 食生活からみたアメリカ文化  
久保田剛久 近代日本における服飾の変遷

河野 和彦 黒人霊歌における黒人のキリスト教

越野 竜弥 中世ヨーロッパの都市

小林 義範 黒人問題におけるジム・クロウ法の重要性

斉藤 明子 一九世紀ウィーン——クリムトとシーラー——

嵐田 陽一 バスーンの歴史について

杉崎真佐美 障害という翼を持った天使たち

高野 一彦 アメリカにおける異民族の同化について

田邊 麻美 ベール神殿——他文化と独自文化の融合性——

津幡佳永子 マキアヴェリの政治理論及び人間像

中野 都 中世の城

長山 宏 ユダヤ人と偏見

藤田 正志 日英テレビ文化の比較——日本のテレビの将来——

堀 利裕 アメリカ映画に見るヴェトナム戦争

牧野 正広 古代ギリシアの奴隷

間館 祐美 ショパンの音楽における民族的性格について

水野 靖宏 プラトンにおけるギリシア神話の神々について

宮前 里美 『言葉』の国のアリス

望月 秀美 マザー・グースの唄——その独自性と存在価値の追求——

矢ノ上雅子 だまし絵にみるユーモア

吉岡 以策 原始キリスト教におけるパウロの福音

米山 武 一九六〇年代のアメリカ社会の音楽への影響

渡辺千登生 メキシコのフォークカトリシズム

渡辺 幹郎 スプーン、ナイフ、フォークの位置——スプーン、ナイフ、フォークはいかに普及したか——

佐久間一郎 映画はどこまでメッセンジャーになれるか

吉岡 宏記 開国期のクリシタンからみる日本人の宗教観

浅野 正子 時代パラダイムの中の進化論

荒井 真澄 雑誌メディアから見た日本女性比較

石井 啓子 ヨーロッパと非ヨーロッパの接触——大航海時代・夢と希望の行方——

石本 隆司 グレゴリオ聖歌の変質原因から見るハーモニーと対位法の高度な発達における西欧文明と精神世界の背景

伊藤 靖 イギリスの若者の生態

岩田 敦子 現代社会におけるフィットネスクラブの必要性

内海 玲子 喪うことの悲しさ——ステレオタイプ化した老人像への挑戦——

大澤 亜弓 「なぜ、今はスマートの社会なの？——食生活に反映される社会の変化」

大塚 一儀 ソウルの観点から見たアメリカ黒人音楽とアメリカ黒人社会

小川 朝子 パステル画の美術史的評価をめぐって

荻野 英之 ギリシアにおける英雄観 ヌアイアスを中心とし

て

金児 浩光 英語教育の在り方

神戸 雅文 ルターにおける（二世界統治説）

窪田まゆみ ヨーロッパにおける中等教育制度から見た国民性

——西ドイツとイギリスを比較して——

小林 千夏 声なき叫び——生命を考え直す——

斎藤 恭 ソクラテスの「死」とは

島崎 正 エイズ——人類のために生れ人類によって広めら

れた最大の難病——

清水美紀夫 都市形成に自動車交通の果たした役割

砂子 順子 ジャンヌ・ダルクの二面性

曾根 隆弘 スポーツとヨーロッパ文明

立花 慶子 アリストテレスの人間観 ヌアクラシアを中心とし

て

田原佐樹子 現代文化におけるレコード産業の発展

小林 弘行 人種差別からみたアメリカ合衆国

鼻輪 敦子 「レトロ」がブームを越える時

深澤 智明 愛について

真下 靖子 ドイツ・プロテスタント教会と宗教改革との関係

——ヨーロッパ近世史に於けるルターの音楽活動

の影響とその周辺——

水上少枝子 ソフィストとソクラテス——その教育を中心

に

三原 直子 ドイツ文化の言語地理学的考察

村松 美和 パルテノン神殿の成立の政治的・社会的意義

——パルテノン神殿の必要性をめぐって——

八木 千夏 日本の肉食の歴史にみる、ヨーロッパと日本の肉

食観

山田 智 アメリカ人の日本人観

吉澤 正 野球起源と日本への伝来

山内 浩子 アメリカにおけるベトナム戦争

渡辺 正史 ライン川とドナウ川の地理探索

黒田 智己 アンシャンレジーム下の食風景

田村 正芳 近代ケース・ワークの発展史

藤井 琢彌 日米貿易摩擦に及ぼす文化的要因

近藤 泰広 デュボスの思想——科学・文明・森林・技術・自

然——